

東京外国語大学外国語学部

2009年度卒業論文

トルコ民家の歴史的変遷  
—内部の構造に着目して—

南・西アジア課程トルコ語専攻

学籍番号：8506087

執筆者指名：牧 史織

指導教官：新井政美

はじめに-----	2
第一章 遊牧民時代の内装とその詳細-----	3
1 遊牧民時代の住居-----	3
2 家具の配置-----	3
第二章 オスマン帝国期の民家内装とその詳細-----	6
1 トルコ北西部地域の民家-----	6
2 内装-----	7
(a)ソファ-----	7
(b)床面-----	8
(c)壁面-----	11
(d)天井-----	13
第三章 19世紀の近代化以降の民家内装-----	16
1 家具の導入-----	16
2 内装の変化-----	17
(a)床面-----	17
(b)壁面-----	17
(c)天井-----	18
おわりに-----	20
参考文献-----	20
図版一覧-----	21

## はじめに

民家こそ、最もその民族の気質や文化を反映しているものではないだろうか。権力者層のものである宮殿や、宗教的役割を担うモスクとは異なる、ごく一般の人々が暮らしていた住居であるからだ。

もともと中央アジアの遊牧民であったトルコ民族は、その後アナトリア・地中海沿岸に定住し、オスマン帝国を築いた。10世紀にはイスラム教と邂逅するなど、その移動・定住の過程において多くの他民族・他文化と接触してきた。さらに定住してからも、征服活動や経済活動を通じて様々な文化を取り入れ、やがて西欧化の波にのまれていく中で彼らの生活は変化していった。

テントから出発した彼らの民家は、一般的に外観がシンプルなことが特徴の一つである。その一方で内装には力を入れ、遊牧民時代の“üstte gök, altta toprak vardır”（上には空、下には地面）という考え方に大きく影響された構成となっている。実用性を追求した部位もあれば、実用性にはこだわらず装飾性を追求した部位もあり、非常にめりはりのついた内装を受け継いできたのだ。

そこで本論では、トルコ民族の民家内装を遊牧民時代—オスマン帝国期—19世紀の近代化以降の3つの時代に区分し、その変遷と詳細を解説する。

第一章では、ルーツとなった遊牧民時代のテントを取り上げる。まだ厳密には「内装」というレベルには達していない時期ではあるが、家具の配置等を中心に扱う。第二章では、オスマン帝国期の民家内装について論じる。ただし、広大な帝国の中では地域ごとに若干の差異があるため、本論では北西部地方（エディルネ、イスタンブル、ブルサ、サフランボル等）に特化する。第三章では、19世紀の近代化以降の内装を取り上げる。西欧化に伴い椅子等の家具が導入されたことにより、民家内装が大きく変化した時期である。

従来、民家内装の変遷に焦点を合わせた研究は多くない。本論では、トルコ民族の地域ごとの民家について扱った陣内秀信、谷水潤の『トルコ都市巡礼』<sup>1</sup>と、オスマン帝国期の民家全般について扱った Önder Küçükerman の研究<sup>2</sup>を主な資料として用いた。

---

<sup>1</sup>陣内秀信、谷水潤(編)『トルコ都市巡礼』(Process Architecture, No.93) 1990

<sup>2</sup> Önder Küçükerman, *Turkish house in search of spatial Identity - Kendi mekânın arayışı içinde Türk evi*, İstanbul: Turing, 1996 (以下、Küçükerman)

## 第一章 遊牧民時代の内装とその詳細

### 1 遊牧民時代の住居

トルコ民族の民家の最初の形態は、「Topak ev (トパク・エヴ)」あるいは「Alacık (アラジック)」と呼ばれるテントである。<sup>3</sup>初期の中央アジアにおけるトルコ民族は、肥沃な牧草地を求めて常に場所を移動する生活を送っていた。そのため、テント生活では、生活に関連する全てのものを単一の住居に納めることが必要とされた。住居そのものも、そして住居の中のあらゆる生活用具も持ち運ぶことが重要だったのだ。

なお、「遊牧民時代のトルコ民族」と一言にくくるのは、時代や民族系統といった点から鑑みるといささか乱暴であることは否めない。しかし本論では、Cengiz Eruzu の研究を参考として論じていきたい。

### 2 家具の配置

移動生活であろうと定住生活であろうと、人間の生活における基本行動はあまり変わらない。すなわち、座る、寝る、食べる、作業する、家族と集まる、寒さをしのぐ、などである。この基本行動を支える生活用具をも持ち運んでしまうのが、テント生活である。

「座る、寝る、モノを収納する、寒さをしのぐ、食べる、家族と集まる」といった基本行動にテント生活の家具をあてはめてみたい。

---

<sup>3</sup>Cengiz Eruzu, “Turkish House,” in 陣内・谷水(編)『トルコ都市巡礼』(以下、Eruzu ), p.46 (以下、Eruzu)

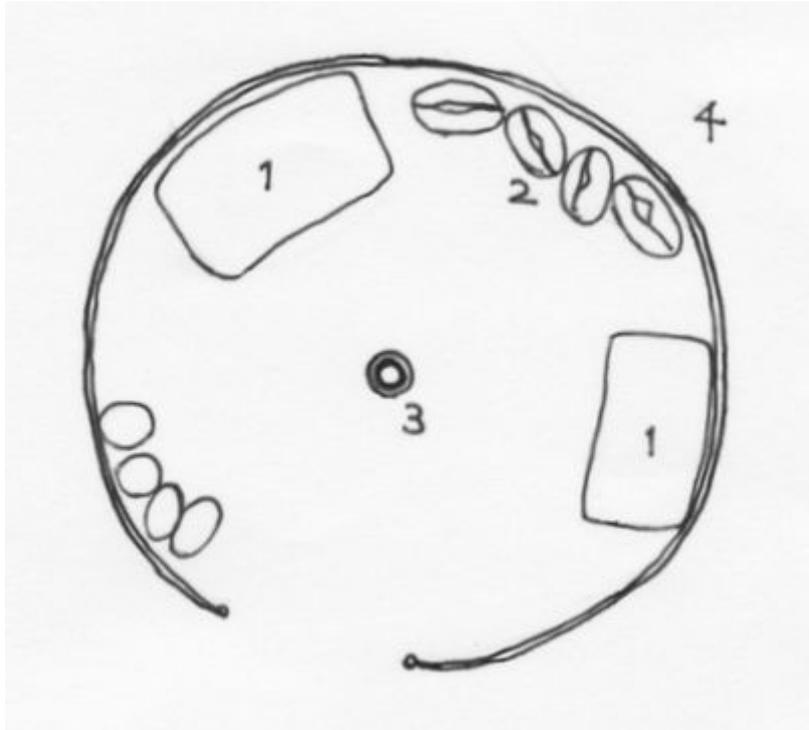


図1

- ・ 座る、寝る＝毛布やマットレス（図1－1）

テントでは、毛布やマットレスが地面にそのまま敷かれていた。<sup>4</sup>定住生活におけるソファやベッドにあたるものである。

- ・ モノを収納する＝荷袋（図1－2）

前述の通り、生活用品もテントとともに持ち運ぶ必要があった。毛布・マットレスや食料、衣類、生活器具といった必需品は、テントにおいては大きな荷袋に収納されていた。定住生活における、戸棚にあたる。

- ・ 寒さをしのぐ＝火桶（図1－3）

暖房器具もまた、持ち運び可能でなくてはならなかった。定住生活における暖炉にあたるのが、火桶である。寒い時期においてはこの火桶が内部空間の中心的位置を占めた。<sup>5</sup>

- ・ 食べる、家族と集まる

定住生活においてはいわゆる「リビング」などといった共用スペースが該当するが、これらの基本行動は必ずしも屋内で行われたわけではない。いずれ別の場所に移動することが決まっていて、「住居そのものと生活用具全てを持ち運べる」ことが重要なテント生活に

---

<sup>4</sup> Eruzu,p.48

<sup>5</sup> Eruzu,p.48

においては必要以上のスペースを取ることは好ましくなかったのだ。そのため、時には屋外をも利用した。いくつかのテント群の集合によって囲まれた空間（図1-4）は、人々が集まり、調理・食事をするのに有用なスペースだった。そして、この空間が後に、定住生活における共有スペースへと発展していくのである。

以上のように、遊牧民時代のテント生活は、住居そのものと生活用具全てを持ち運べることを前提に、しかし生活に必要な家具をそろえた生活であった。そしてこのテント生活は、トルコ民家のルーツとして定住後の民家内装にも大きく影響している。

## 第二章 オスマン帝国期の民家内装とその詳細

### 1 トルコ北西部地域の民家

一口にオスマン帝国期と言っても、地域や民族によって民家の詳細な特徴は異なっている。(図2) もちろん、その家族の地位や経済状況によっても民家は変化する。本論では、トルコ北西部に暮らしていたトルコ民族の中でも、2階建ての民家が維持できた裕福な層の民家に特化して解説したい。

トルコ北西部の主要都市としては、イスタンブル、ブルサ、エディルネがある。1326年、オスマン帝国はブルサを最初の首都と定め、1369年にはエディルネに遷都した。1453年にはメフメト2世がビザンツ帝国を征服し、その首都であったコンスタンティノープルに遷都した。この都市が、後に「イスタンブル」と呼ばれるようになる。さらに、北西部地域のサフランボルという都市は、首都や政治的主要都市となることはなかったが、伝統的な民家や町並みが残っていることで世界的に有名である。このように、イスタンブル、ブルサ、エディルネがかつての首都であったことや、サフランボルがその伝統的な町並みによって高く評価されていることから、北西部地域の民家についての資料は比較的多い。

地中海やマルマラ海に面し、緑豊かな丘陵地帯である北西部地域では、民家の建築材料はもっぱら木材である。ただし、1階には石の厚い壁を用い、上階を木造とするなどといった石と木を組み合わせたものも多い。<sup>6</sup> トルコの民家はテントから派生したばかりの時は一階建てであったが、時代とともに2階建てになっていった。2階建ての住居では下階は人間の生活に直接影響のない目的<sup>7</sup>に利用され、上階が生活スペースであった。特にサフランボルではその気候と地形<sup>8</sup>から「夏の家」「冬の家」と住みわけがなされたが、「冬の家」の方が壁や窓ガラスが厚い程度で、内装には大きな違いは見られない。17世紀後半に中

---

<sup>6</sup>陣内秀信、谷水潤「前書き」陣内・谷水(編)『トルコ都市巡礼』(*Process Architecture*, No.93) 1990年、p.6

<sup>7</sup> 農村では家畜小屋、都市部では倉庫など。

<sup>8</sup> 季節風が特徴。冬は寒い季節風を避けるために谷底に暮らし、夏は日差しと涼風を受けるため山の標高600メートル前後に暮らす。山本達也『建築探訪8 トルコの民家——連結する空間』丸善、1991年、pp49-50 (以下、トルコの民家)

東を旅して回ったフランス人ペティ・ド・ラ・クロワは、イスタンブールの民家について「外側はひどいものの内装はかなりよい」と書き記している。<sup>9</sup>このように、トルコ民家において家屋外側はあまり重要視されず、内装に注意が払われた。そのため、内装からこそ彼ら独自の文化を読み取ることができる。

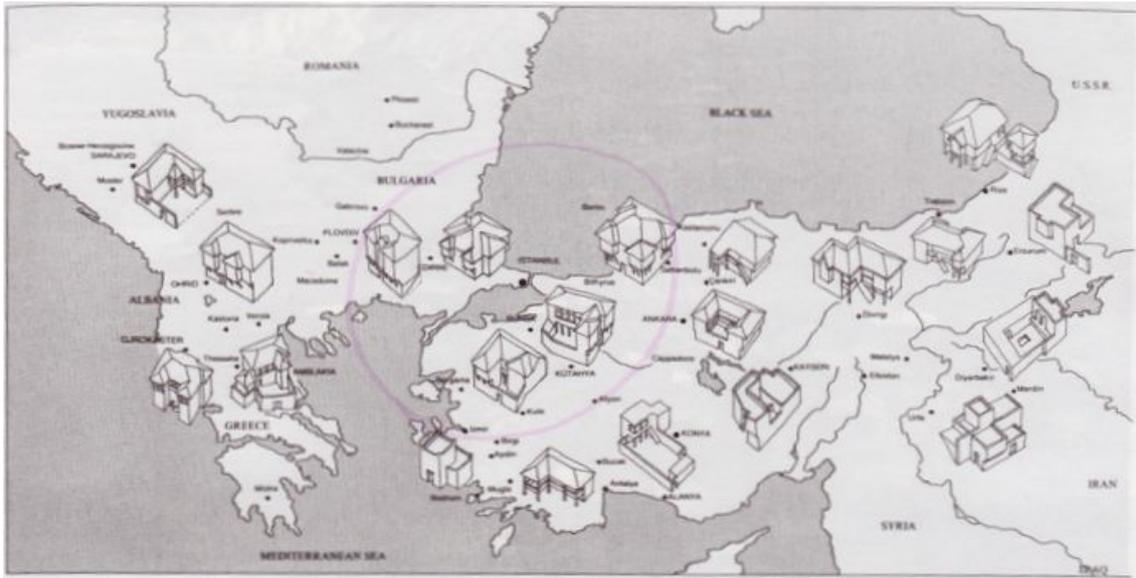


図 2 10

## 2 内装

### (a) ソファ<sup>11</sup>

我々が現在よく目にする洋風の家宅あるいはヨーロッパの民家と、トルコ民家の大きな違い。それは「ソファ」という空間の存在である。厳密に言えば「ソファ」は内装ではなくその空間そのものを指すが、本論では内装の区分で扱いたい。

<sup>9</sup> テレーズ・ビタール著、富樫環子訳『オスマン帝国の栄光』、創元社、1995、p72

<sup>10</sup> 丸で囲まれたところが本論で扱う地域である。

<sup>11</sup> トルコ語で“Sofa”と表記される。和訳は文献によって様々で、山本達也の「トルコの民家」では「ソファ」、陣内秀信、谷水潤の「トルコ都市巡礼」では「ホール」と記されている。本論ではトルコ語での名称を優先したいと考え、「ソファ」と呼ぶことにした。なお、「一般にソファと呼ばれるこの空間も、地方ごとに様々な名称で呼ばれている。ハヤット（人生）、ディヴァンハネ（談話場）、タンドウルエヴィ（炉のある空間）、セルギイ（展示）、サイバン（深い軒）、チャルダック（棚、ふじ棚等の意味で）」トルコの民家、p71

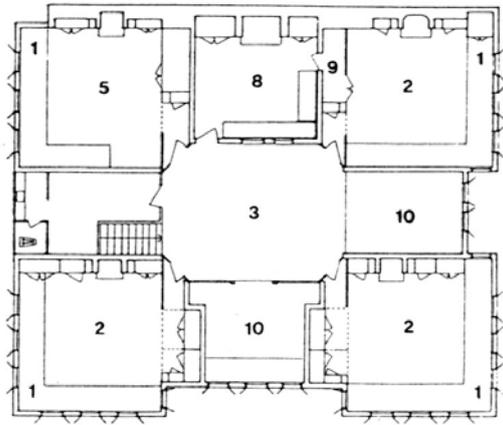


図 3

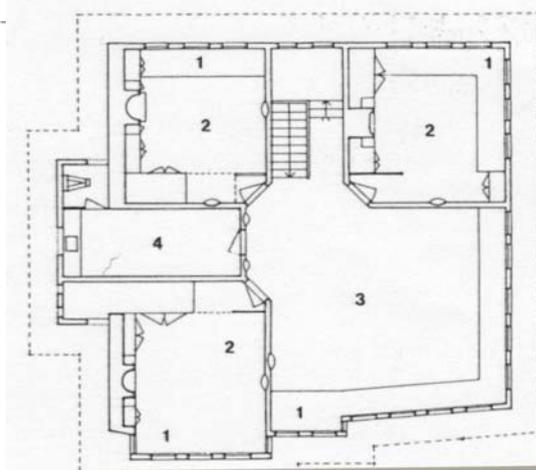


図 4

図 3 及び図 4 の 3 がソファである。地上階の中庭から 2 階にあがる階段を登りきったところに広がる空間であり、このソファから 2 階の各部屋に入ることができる。図 3 のようにソファの四方が部屋に囲まれる構造もあれば、図 4 のようにソファが外に向かって開放されている構造もある。

このソファという空間は、第一章で述べた遊牧民時代において複数のテント群の集合によって囲まれた空間に起源を持つと考えられる。図 4 のような、外に向かって開放されたソファは特にオリジナルの特徴を受け継いでいる。遊牧民時代は「食べる、家族と集まる」といった基本活動が用途であると述べたが、定住後の民家においても用途は変わらない。炊事洗濯や食事をし、農村であれば農具の手入れや農作物の仕分けも行われたし、時には結婚式や葬式などといった一族が集まる特別なイベントに用いられることもあった。

## (b) 床面

オスマン帝国期のトルコの民家において、床面と天井は全く異なる考えによって設計された。床面はシンプルな構造<sup>12</sup>の一方で、天井にいけばいくほどは高度な設計・装飾になっていった。これは、“üstte gök, altta toprak vardır”（上には空、下には地面）という遊牧民時代の考え方に影響されたものである。<sup>13</sup>この考え方は近代化が始まり、ヨーロッパの家具

<sup>12</sup>あくまで構造がシンプルだったということで、見た目は絨毯が敷かれるなど（次頁参照）華やかに飾られていたと考えられる。

<sup>13</sup> Küçükerman, p145

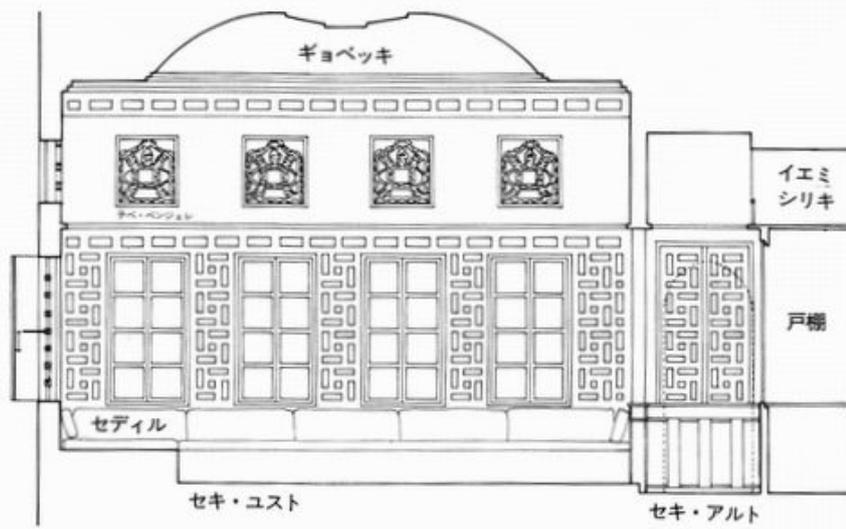
が導入されるまで何世紀にも渡って変わらなかったようで、年代ごとに見てもオスマン帝国期の民家における内装設計に大きな差はない。

床には敷物が敷かれた。この敷物はキリムかイグサ製、時にはフェルト製であった。<sup>14</sup>遊牧民時代は大地の上にテントをたて、テント内では地面に直接マットを敷いていた。床上の敷物は冬の家だけでなく、防寒を必要としない夏の家でも確認できることから、室内に移ってもその習慣が残ったと考えられる。

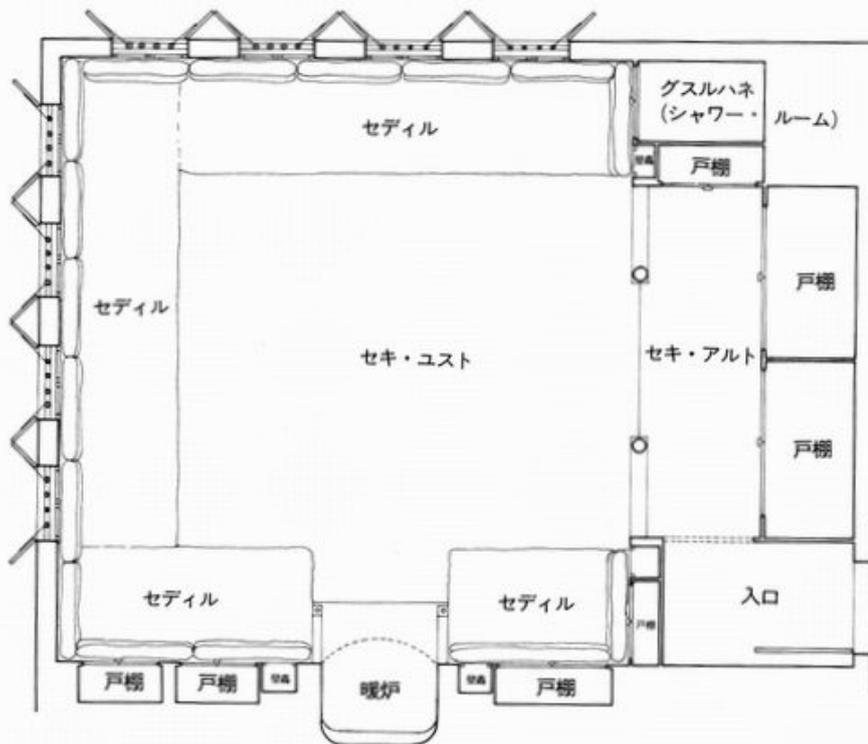
尚、内装について論じるに際し、以下の断面図及び平面図をご参照いただきたい。

---

<sup>14</sup> Küçükerman, p145



部屋の断面図



部屋の平面図

図 5

## ・セディル

オスマン帝国期のトルコ民家の部屋内では、人々はセディル (sedir) と呼ばれる長椅子を用いた。このセディルは、部屋の入り口と暖炉を除き、部屋を一周する形で設けられた。セディルにはたいてい彩り豊かなマットがかけられ、座る時や寝る時には座布団が用いられた。

セディルの高さは床から 35～45 cm、幅は 75～100 cm 程度である。この独特の高さと幅により、セディルは、座る、作業をする、眠る、といったあらゆる用途に対応することができた。<sup>15</sup>西洋式の椅子と比べるとかなり低い、これはトルコ民族がセディルだけでなく床にも座って生活していたためと考えられる。床には前述の通り絨毯が敷かれていたが、床に座った場合、35～45 cm のセディルは肘掛としてちょうどよい高さである。また、セディルに腰掛けて床に足をおろすと考えるとこの高さは少し窮屈である。しかし十分な幅が取られていることから、セディルは座るだけでなく、クッション等を用いて寝そべるように用いることに適していたと考えられる。この「寝そべるように」生活していたことは、後述の壁面や天井の内装にも特徴を与えた。

以上のように、セディルは、座る、作業をする、眠る、といったあらゆる用途に対応することができた。さらにセディルが部屋の外側に配置されることで、部屋中央の床面は広く、そして清潔に保つことができることから、中央床面にも有効空間を与えていた。

また、セディルは常に窓に接していることから、室内でありながら外との距離が短い。これは、遊牧民時代のテント生活における中と外の近さから影響を受けていると考えられる。

### (c) 壁面

トルコの民家においては、窓の数が多いほど格式が高く、大きい部屋と位置づけられた。そのため、主室は普通隅部に設けられた。<sup>16</sup>ふたつの壁面に接していることで、窓を多く取ることができるからと考えられる。

それでは、オスマン帝国期のトルコ民家の内装壁面の特徴をパーツごとに分類して論じる。

---

<sup>15</sup> トルコの民家、p66

<sup>16</sup> トルコの民家、p62

## ・戸棚

さて、前述のソファからは各部屋に入ることができる。扉を開け、あるいは垂れ幕をくぐると、入り口の壁面に戸棚が設けられているのに気が付く。この入り口部分に備え付けられた戸棚は一般的には *dolap* と呼ばれるが、収納するものによってそれぞれ異なる呼称が存在する。<sup>17</sup>人々はここに、あらゆる日用品や座布団、寝具等を仕舞った。この戸棚が第一章で述べた、テント生活時のモノを収納する荷袋に該当するのは明らかだ。

戸棚は、その高さによって室内の有効空間を表していると考えられる。つまり、戸棚の最上部の高さが、人間が活動する時に用いる空間の上限と同じなのだ。なぜなら、部屋の高低や構造に左右されず、戸棚はどの民家でもほぼ一定の高さであるからだ。<sup>18</sup>そのため、長椅子（セディル）や暖炉、窓（後述の高窓は除く）といった実用家具は戸棚の上限よりも低い位置に設置されていた。たいていは木製の板で仕切られていたが、格式の高い部屋においては木板に装飾がほどこされることもあった。しかし、絵を描き、彩色するなどといった華やかな装飾がほどこされるようになったのは、近代化以降である。

## ・暖炉

テント生活において使用されていた、持ち運びができる火桶。定住生活においては持ち運ぶ必要がなくなり、壁に取り付けられるようになった。暖炉は、オスマン帝国期の民家において室内に突出することが許された唯一のパーツであった。セディルが室内の外側に配置されたり、戸棚が壁に埋め込まれ、中央に広がりを与えていたことは前述の通りだが、その特徴の中で暖炉のみが中央の有効空間に突き出すよう設置されることがあった。

山本達也によると<sup>19</sup>、

- ① 壁の中に完全に埋め込まれたもの

---

<sup>17</sup> 寝具 (*yüklük*)、水タバコ (*çubukluk*)、ターバン (*kavukluk*)、水差し (*testilik*)、ナプキン (*peşkirlik*)、ランプ (*lmbalık*)、コーヒー・ポット (*cezvelik*)、カップ類 (*fincanlık*)、花 (*çiçeklik*)、トルコ帽 (*feslik*)、歩行用の杖 (*değneklik*)、すぐに手が届くところにある何でも入れられる (*tembel deliği*) など。 *Küçükerman*, p171

<sup>18</sup> 220センチメートルを超えることはない。トルコの民家、p64

<sup>19</sup> トルコの民家、p68

② 戸棚の間等に漆喰で作られた装飾性の強いもの

③ 炉口そのものが大きく壁面より突出しており、大きな火を燃やすことが可能であるの、以上3点に分類できるという。

①は炉口に開閉式の扉が取り付けられることもあり、扉を閉めると炉は完全に見えなくなる。②は装飾性が高く、冬に部屋を暖めるほどの威力は持たない。チャイやコーヒーのための湯を沸かすなどの用途に用いられ、夏冬で住み分けをしている地域においては「夏の家」でよく見られる暖炉である。③は②とは対照的に、大きな火を燃やすことができ、料理なども行われたと考えられる。

#### (d) 天井

前述のように、トルコ民族は背の低い長椅子=セディルに寝そべるように生活していた。そのため、自ずと視線は上へと向く。このトルコ民族のライフスタイルならではの「下から上への目線」は、天井の内装に大きな影響を与えた。

トルコ民家において、天井はまさに特異な存在である。建物の構造とは関係なく、かつ実用性もなく、しかし全体が装飾に覆われ大きな存在感を示している。

#### ・ 高窓

私たちが生活する西洋式の家屋では、窓は人間が立ち上がった時の目線の高さにあることがほとんどだ。しかしオスマン帝国期のトルコ民家においては、「下から上への目線」により窓の位置は独特のものであった。立ち上がった時の目線の高さにある窓の上に、もう一つの窓=高窓が設けられたのである。厳密に言えば、天井と壁面の中間点に設けられたものであるが、本論では便宜的に「天井」の区分で扱う。

この高窓はテペ・ペンジェレ (tepe pencere) と呼ばれる。これは実用的なものというよりは、抽象的、装飾的な役割を果たしていた。しっくいを用いたステンド・グラスであり、装飾性の強い明りとりといった用途に用いられた。通常二重ガラスで、外側に曇りガラス、部屋側に色ガラスがはめられていた<sup>20</sup>ことから、日差しを取りこむと部屋内がステンド・グラスの色彩にいろどられ、大変美しかったと想像できる。また、部屋の高い位置から彩り

---

<sup>20</sup> トルコの民家、p68

豊かな光を室内に取り込むことで、床面の絨毯をより豪華に見せる効果もあった。<sup>21</sup>前述のようにトルコ民家においては窓の数が部屋の格式を表したことから、高窓（テペ・ペンジェレ）は実用的ではなくとも、重要なものであったと考えられる。

なお、ブルサからやや南に下ったクラの民家では、テペ・ペンジェレがないものもいくつか確認できる。その場合、テペ・ペンジェレの代わりにカラフルな壁画が描かれている。特に女性の部屋では、女性の故郷の風景が描かれている。

### ・ 天井飾り

これはギョベッキ（göbek）と呼ばれ、直訳すると「へそ」となる。内装においてギョベッキとは、文字通り、部屋のへそ＝中心部を示す天井中央の飾りのことである。

セディルで寝そべるように生活していると自ずと視線が上へ向く。天井と壁の間に高窓（テペ・ペンジェレ）があり、さらにその上に視線をめぐらせると、天井の中央にいつそう華やかな装飾が施されている。これがギョベッキで、天井の中央だけでなく部屋の中心を示している。トルコの民家の部屋はたいてい正方形、あるいは正方形に近い形で作られており、ギョベッキを中心点として非常に求心性の高い設計となっている。

もちろん、ギョベッキを含めた天井の装飾度合いは全ての部屋で一緒というわけではない。今までに述べた内装パーツには何かしらの実用的な用途があるが、ギョベッキには実用性はない。たとえば、重要度の高い部屋（主室、客間、婦人の間<sup>22</sup>など）では天井全体に幾何学模様の装飾がほどこされることが多い。そしてその中央に、ひととき華やかなギョベッキがほどこされるのだ。

以上、オスマン帝国期のトルコ民家における内装を、特徴的なパーツに分類して論じた。トルコ民家の室内内装での最も重要な特徴は、その「自由な用途」にあると考えられる。つまり、座る、寝る、食べる、作業する、家族と集まる、寒さをしのぐ、といったあらゆる生活行動を室内で行うことができるのだ。家具に邪魔されない広々とした床は作業に最適である。床からわずかに高いだけの長椅子（セディル）や、壁に埋め込まれた暖炉は人々

---

<sup>21</sup> Küçükerman, p129

<sup>22</sup> ハレムリッキと呼ばれる。イスラム教の影響で、セラームルック（男性の間）とハレムリッキ（夫人の間）というふうに民家そのものを二つの区画に分けてしまうこともあった。トルコの民家、p55

の行動の邪魔にはならない。寝具といった家具は、壁と一体化している戸棚に収納すれば場所を取らない。そして室内が汚れる可能性がある作業や室内には収容できないほどの人数が集まる作業にしても、ソファで行うことができる。

このように、遊牧民時代のテント生活の要素を受け継ぎながら、独自の発展を遂げたトルコ民家であるが、19世紀の近代化以降は大きく様変わりしていく。その変化を次章で論じたい。

### 第三章 19世紀の近代化以降の民家内装

#### 1 家具の導入

19世紀になると、近代化に伴いヨーロッパから家具が導入され始めた。私たちの生活でも当然のように使われている、椅子や机、ベッド、ストーブなどである。導入された時期や度合いには地域差があるが、本論で扱う北西部地域はイスタンブルやエディルネといった都市部があり国際交流が盛んであったことから、19世紀にはだいぶヨーロッパ式家具の導入がすすんでいたと考えられる。

ヨーロッパの家具が生活の中に取り入れられると、トルコ民家の内装は大きく変わった。その理由は3つある。

1つ目の理由は、「目線の変化」である。第二章で述べた、背の低い長椅子セディルに寝そべるように座っていたことによる「下から上への目線」が失われたのだ。

では、セディルに寝そべるように座るのと、ヨーロッパの椅子に腰掛けるのと、人の目線はどのように変化するのだろうか。下図を参照されたい。

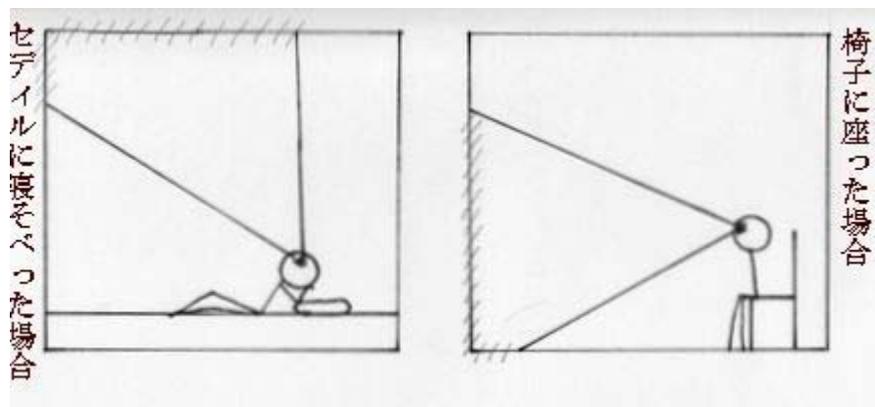


図6

このように、セディルでの「下から上への目線」は、ヨーロッパの椅子に腰掛けることにより「平行な目線」へと変化したのだ。この「平行な目線」への移行が内装にどのような影響を与えるかを考えてみたい。セディル上での目線が壁面上部と天井に集中するのに比べ、椅子に腰掛けた際の「平行な目線」は平行線上の壁面に集中する。つまり、壁面上部や天井に目線は向かなくなるのだ。このため、今まで壁面上部や天井に集中していた装飾が、壁面の目線の高さへと移動したのだ。

2つ目の理由は、「収納量の変化」である。遊牧民時代のテントにおいてモノを収納した

荷袋が、オスマン帝国期の民家ではユックルック（戸棚）へと発展した。前述の通り、人々はユックルックに座布団、寝具等を仕舞っていたが、ヨーロッパの椅子やベッドならば戸棚に収納する必要はない。そのため、家具が部屋に出しっぱなしになる一方で、ユックルックに収納するモノが減りその意味が薄れていった。ヨーロッパの家具を導入することで、遊牧民時代の「持ち運ぶ」という習慣は完全に失われたといえる。

そして最後に、「求心性の喪失」が挙げられる。オスマン帝国期、正方形の室内において中央の床面が広くあけられ、暖炉以外に有効空間に突出する家具はなかった。さらに天井飾りとギョベッキにより部屋の中央が示され、求心性はトルコの民家の大きな特徴であった。しかし、ヨーロッパ式の家具及びそれに付随するパーツが室内に置かれ、その有効空間を横切ることによって、トルコの民家独自の求心性は失われた。

## 2 内装の変化

それでは、「目線の変化」、「収納量の変化」、「求心性の喪失」の3点が内装にどのような変化をもたらしたかを具体的に見てみたい。

### (a) 床面

“üstte gök, altta toprak vardır”（上には空、下には地面）という遊牧民時代の考え方に基づき、シンプルな構造であった床面。部屋の最外部を一周するセディルはヨーロッパ式の椅子やベッドに取って代われ、失われた。さらに、オスマン帝国期においてはセディルが部屋の外側に配置されることで、部屋中央の床面に有効空間を与えていた。これも、部屋のあちこちに椅子やベッドが配置されたことにより、トルコ民家独自の有効空間は失われてしまった。さらに、有効空間をさえぎったことで部屋の求心性も失われた。

### (b) 壁面

前章でトルコ民家における壁面内装のパーツとして、戸棚と暖炉を挙げた。

ヨーロッパ家具の導入以降、「収納量の変化」により戸棚はその役割を失い始めた。それまではセディル（長椅子）に敷く座布団や寝具等が仕舞われていたが、ヨーロッパの椅子

やベッドを使うようになり収納するものがなくなった。そのかわり、「目線の変化」のため以前よりも人々の目線は並行線上にある戸棚にそそがれることになった。これらのことから、戸棚は収納能力よりも壁面を飾ることに重きが置かれるようになった。戸棚の扉の表面には宇宙樹、チューリップ、幾何学模様などで飾られるようになった。<sup>23</sup>収納という目的が失われ、時と共にその空間や形も徐々に失われていった。さらに、有効空間が椅子やベッドの配置により失われたことから、その上限で有効空間の範囲を示していた戸棚の役割もまた失われたことも、戸棚の衰退の一因であろう。

暖炉もまた、近代化以降はヨーロッパ式のストーブにとってかわられた。壁に埋めこまれていた暖炉は取り除かれ、ストーブが部屋の中央に置かれた。オスマン帝国期の民家では、部屋はたいてい正方形に作られ、前述のギョベッキを中心として求心性の高い設計となっていた。しかし、ストーブを設置するようになると、付随する煙突が室内を横切るようになる。<sup>24</sup>このことによりトルコ民家の内装において特徴的な求心性は失われたと考えられる。室内に据え置かれた椅子やベッドと共に、この煙突もまた「求心性の喪失」の大きな原因となった。

### (c) 天井

オスマン帝国期のトルコの民家において天井内装を特徴付けていたのは、前述の通り「下から上への目線」であった。セディルに寝そべるようにしていた際に目線が集中していた壁面上部と天井は、椅子に座ることで「平行な目線」へと変化すると以前よりも目線が向かなくなった。さらに、高窓（テペ・ペンジェレ）もギョベッキも実用性はない。そのため、そのため、高窓（テペ・ペンジェレ）とギョベッキは近代化のかなり早い段階で失われていったと考えられる。特にテペ・ペンジェレは、20世紀以降の民家では確認されていない。<sup>25</sup>

さらに、ストーブの設置によりその煙突が室内空間を横切るようになると、部屋の求心性が失われたことは前述した。その求心性の中心点となっていたのがギョベッキであったが、ストーブ導入以降はもはや部屋の中央を示す必要もなくなった。この「求心性の喪失」も、

---

<sup>23</sup> トルコの民家、p64

<sup>24</sup> ただし、富裕層の民家においては、オスマン帝国期の暖炉が残されているものも多く確認できる。

<sup>25</sup> Küçükerman, p131

天井装飾が衰退した一因である。

以下、オスマン帝国期のトルコ民家におけるパーツ（家具）を軸に、遊牧民時代から近代化以降までの変化を表で示す。

遊牧民時代	オスマン帝国期	近代化以降
毛布、マットレス	長椅子(セディル)	ヨーロッパ式の椅子、ベッドに移行。●、▲、■を引き起こす。有効空間も喪失。
荷袋	戸棚	▲により収納という用途を失い、●により装飾品としての用途に移行した。徐々に衰退。
火桶	暖炉	ストーブに移行。付随する煙突が室内を横切り、■を引き起こした。
—	高窓 (テペ・ペンジェレ)	●により早い段階で衰退。
—	ギョベッキ	●及び■により衰退。

● 「目線の変化」

▲ 「収納量の変化」

■ 「求心性の喪失」

## おわりに

本論では、トルコ民族の民家内装を遊牧民時代—オスマン帝国期—19世紀の近代化以降の3つの時代に区分し、その詳細と変遷を追った。遊牧民時代は住居に関わる全てのものを持ち運べることが重要で、テントでの生活がオスマン帝国期の定住民家においても構造や家具といった点で大きな影響を与えていると説明した。また、下から上への目線や独自の収納スペース、部屋に与えられた求心性などトルコ民家の特徴が近代化以降、ヨーロッパ式の家具の導入によって失われていったことも解説できたと思う。

限られた使用用途しかない宮殿やモスクとは異なり、民家には一般市民が暮らしていた。そのため、考えていた通り民家の内装の詳細や変遷を通して彼らの考え方や暮らし方を読み取ることができたと思う。自然を愛し、華やかな装飾を室内にほどこし、それでいて実用性も追求するなど、まさに多様性に富みおおらかな彼らの気質の一端をこの研究で感じた。

遊牧民時代のテントと近代化以降については内装についての資料が少なく、またその少ない資料の全てを手に入れられたわけではなく、資料不足が否めない。また、本論で取り上げた以外にもトルコ民家には様々な独自性がある。民家の室内内装に特化し、全体や他の構造を扱えなかったのが心残りである。更なる資料の検証、及び室内内装にとどまらないトルコ民家全体の詳細や変遷の追求を今後の課題としたい。

## 参考文献

- 陣内秀信、谷水潤(編)『トルコ都市巡礼』(*Process Architecture*, No.93) 1990
- 山本達也『建築探訪8 トルコの民家——連結する空間』丸善、1991
- テレーズ・ビタール著、富樫瓊子訳『オスマン帝国の栄光』、創元社、1995
- 村田あが「牧民テントの空間概念についての考察：遊牧民テントの空間に関する考察 第3報」(『東京家政学院大学紀要』東京家政学院大学・東京家政学院短期大学、1989)
- Önder Küçükerman, *Turkish house in search of spatial Identity - Kendi mekânın arayışı içinde Türk evi*, İstanbul: Turing,1996
- Reha Günay, *Geleneksel Safranbolu evleri be oluşumu*, Ankara : Kültür ve Turizm Bakanlığı Yayınları, 1989

## 図版一覧

- 図1 遊牧民のテント内装 Eruzu, p48,50 のデータにもとづき筆者作成。
- 図2 トルコ民家の類型地図 陣内秀信、谷水潤(編)『トルコ都市巡礼』(*Process Architecture*, No.93) 1990,p.59
- 図3 及び図4 トルコ民家の見取り図 Reha Günay, *Geleneksel Safranbolu evleri ve oluşumu*, Kültür ve Turizm Bakanlığı Yayınları, Ankara;1989,p163
- 図5 トルコ民家の部屋の断面図及び平面図 トルコの民家、p107
- 図6 姿勢による視線の違い 筆者作成